

青年版集団同一性質問紙 (GIS-A) の作成 — 信頼性・妥当性の検討 —

Development of Group Identity Scale for Adolescents (GIS-A): Examination of Reliability and Validity of GIS-A

橋本 和典 HASHIMOTO, Kazunori

● 国際基督教大学大学院教育学研究科
Graduate School of Education, International Christian University



集団同一性, 青年版集団同一性質問紙 (GIS-A), 自尊心

group identity, Group Identity Scale for Adolescents (GIS-A), self-esteem

ABSTRACT

本研究は, E. H. Erikson (1959, 1968) の集団同一性概念の教育・臨床的有用性を検討するために, 青年期版集団同一性尺度: GIS-A を作成および, 信頼性と妥当性の検討をすることを目的としている。205名の日本の大学生に調査をした結果, GIS-A は, 下位位相尺度ごとに十分な内部一貫性 ($\alpha = .69 \sim .85$) が示され, 下位尺度は第3位相尺度を除き, 自尊心と有意な正の相関 ($r = .21 \sim .39$), 抑制不安とは有意な負の相関 ($r = -.23 \sim .37$) が見られ, 基準関連妥当性も確認された。また, GIS-A の各位相の特徴が個々の青年の中でどのような関係で存在するかについて検討するために, 階層型のクラスター分析を行い, 1) 集団同一性成熟型, 2) 葛藤型, 3) 擬似型, 4) 未熟型の4類型を得た。

The present study aimed at developing a Group Identity Scale for Adolescents (GIS-A) and examining the reliability and validity of the scale in order to elucidate educational and clinical usefulness of “Group Identity,” which originally derived from E. H. Erikson’s theory (1959, 1968). In this study, 205 university students completed the GIS-A and scores on the GIS-A showed a high internal consistency ($\alpha = .69 \sim .85$). Scale score was significantly and positively correlated with the measure of self-esteem ($r = .21 \sim .39$) and negatively with growth-restricting anxiety ($r = -.21 \sim .39$). Next, in order to examine how 4 group identity phases existed within these adolescents, cluster analysis was conducted. By means of this analysis, 4 clusters were categorized; 1) group identity mature style, 2) conflict style, 3) pseudo style, 4) immature style.

1. 問題と目的

1.1 集団同一性に関する研究の動向

集団同一性group identity と自我同一性ego identityという二大概念によって、個人の内的な発達課題を、集団、組織などの社会システムの中で捉え直す必要性を訴えたのが精神分析家のE. H. Erikson (1959, 1968など)である。彼はまた、青年期を固有の発達位相として重視し、自我同一性への集団同一性の統合をその発達課題とし、個人の自我発達と環境集団からの影響とを調和させることの重要性を指摘した。なぜならば、「エトスと自我、集団同一性と自我同一性の相互補充が、より大きな共通の潜在力を、自我の総合と社会組織双方に提供する (Erikson, 1959, p.23)」からである。

集団同一性に関する研究は、その一側面である民族同一性や社会同一性の研究が活発であるのとは対照的に、青年が発達上身近に経験する仲間集団を代表としたモラトリアム集団およびその集団同一性と自我同一性との関連を扱った論文は数編を数えるのみである (Newman & Newman, 1976; Ritzman, 1973; 近田, 1984; 宮下・大野, 1997など)。また、廿日出 (1992) が指摘したように、集団同一性は、それに関する研究数の少なさもさることながら、日本社会の集団主義的性格と相互依存性、場依存を象徴する否定的な意味合いを含んだ概念として用いられる場合が多く、Eriksonが強調した、自我の成長に寄与する生産的影響についてはほとんど論じられていない。また、集団同一性を視野に入れた研究として、無藤 (1979) による自我同一性に関する面接調査研究があるが、個人がコミットする集団意識、生育上の所属集団の自我同一性への影響には強調点が置かれていないという特徴があり、集団同一性を直接捉える点では不十分であると考えられる。

集団同一性に関連する尺度としては、「集団への関わり方質問紙」(宮下・大野, 1997) や、「Group Identification Scale」(Hinkle, 1989) がある。後者は、認知社会心理学の分野で展開している社会的アイデンティティ理論 (Tajfel & Turner, 1985) が基盤になっている。社会的アイデンティティと

いう概念は、集団同一性概念と内容的には非常に類似している概念である。今後の研究展開が期待されるところであるが、これも、小集団、仲間集団に限局して扱っているものではなく、Eriksonの言う集団同一性の人格発達の影響を測れる尺度構成にはなっていない。

臨床心理学の分野、とりわけ青年期を対象とした集団精神療法の技法構成の流れにおいては、自我の社会化について先鞭をつけたErikson理論の臨床理論としての再検討が行なわれるようになってきている (橋本, 2008; 橋本・西川・河野, 1999; Kibel, 1991; Rachman, 1975, 1889; Scheidlinger, 1964)。中でも橋本ら (1999) は、Erikson以降の研究成果を踏まえ、集団同一性を「個人が過去に所属した集団の体制、構造、理想、雰囲気代表される集団表象との意識的・無意識的連帯であり、それに伴う愛着・所属感等の感情および誇り・プライドなどの肯定的認知が内在化されたものであり、自我同一性のサブシステムを構成するもの」として定義し、集団同一性を位相発達するものとして仮説構成した。その上で、集団への所属感と適応力の脆弱性を示す重度強迫神経症女性の一事例研究を行った。その女性の集団精神療法の展開プロセスを分析し、重症強迫神経症の治療機序の鍵変数として、集団同一性の重要性を指摘した。以下では、この位相発達モデルを中心に集団同一性と個人の発達、病理との関わりについて述べる。

1.2 理論構成—集団同一性、神経症不安、自尊心

表1は、橋本ら (1999) が構成した集団同一性の発達位相理論である。ここでは、作業仮説の前提となる、理論構成を簡単に行い、質問紙の妥当性を検討するための変数を抽出する。彼らは、さらに集団同一性の獲得に失敗した場合の不適応パターンとして i) 神経症的適応、ii) 自己愛的適応、iii) シゾイドの引き籠もり、iv) 原始的防衛機制を基盤にした二者関係へのしがみつき の4パターンを抽出した。神経症には様々な種類があるが、それはその根源となる神経症不安の対処パターンのバリエーションであり、集団同一性が脆

表1 集団同一性の発達位相モデル (橋本ら, 1999)

位相	発達時期	概要
1	2歳～6歳 一次的集団同一性の形成；家族同一性形成	家族集団同一性の獲得。父（代理）、母（代理）との三者関係（同胞を含めればそれ以上）にとどまり、葛藤を十分に味わい、家族集団の機能的なシステム性を体験し、「愛する能力」と「働く能力」の素地を形成する。性的同一性sexual identityをはじめとする自我同一性が発見される。
2	6歳～12歳 二次的集団同一性の形成および集団同一性の葛藤；二次的集団の出現と一次的集団の対象化	二次的集団の魅力や面白さを感じ始め、エディプス期を通して発見された性的同一性と性別同一性を基盤に、同性の集団への帰属など多重集団所属を発展させる。その中で、「敵対している人たちの中から友達を作る能力」、「社会的階層において自分の地位を見つけ、維持する能力」、「怒りをコントロールする能力」「生き残るために必要な課題のために協力する能力」の素地を獲得していく。ここでの危機は家族と二次的集団との間での集団同一性葛藤の克服の失敗であり、不登校等の不適応行動の前駆的感情体験になる。
3	12歳～15歳 集団同一性の追求；防衛としての集団同一性の利用	二次的性徴の発現に見られる身体的変化、性的衝動の増大という内的変化の衝撃からくる「性的不安」「孤立の不安」（小谷, 1991）への防衛的対処として集団同一性の追求が起きる。否認、幼児的取り入れ、投射、投影性同一視などの原始的防衛機制、または、攻撃性によって性衝動を低減しようとするを通じた「スケープゴート・プロセス」「伝播性」などの諸現象が頻発する。自己愛の高まりもあり、個人同一性を追求するあまり、集団から逸脱や、精神的には集団同一性の否認、抑圧が生じやすい。
4	15歳～18歳 集団同一性の成熟；自我同一性と集団同一性の相互関連的成長	ピアとの間で友情を体験し、愛他性の発達・所属集団への忠誠心の高まりを通じて、個人同一性が脅かされることなく、主体的な集団の規範の保持が可能になる。とりわけ異性としての内的対象の自己内への統合が進み、集団内での異質性への許容が大きくなる。集団同一性と自我同一性の相互関連的な成長が特徴となる。
5	18歳～22歳 集団同一性の柔軟性の強化と市民社会への集団同一性の拡大	安定した、柔軟な多重集団所属が可能になり、それぞれの集団に選択的に同一視することができ、社会的な集団へと集団同一性を拡大する。Jacobson (1964) は、こうした集団同一性の確立に失敗した青年の特徴として、自己愛的な態度、情緒の不安定さ、その時々々の環境によって意見が流動的になるような価値観の非一貫性を臨床的に記述した。

弱な個人は、神経症不安を強く有していることが予想される。

また、Grunebaumらは、仲間関係と自尊心は同じ現象の2つの見方であるとし、その現象は循環過程：フィードバック・ループを持つものと結論付けている (Grunebaum & Solomon, 1987, p.477)。つまり、自尊感情は仲間との関係を通して発達するものであり、また、十分に高められた自尊感情は、好ましい仲間関係を営む基礎となるということである。その基本的なメカニズムは、

仲間は「受容、価値、尊重」の感覚を提供してくれるものであり、「我々の行動に注意し、耳を傾け、アドバイスを求め、そして我々の考えや感情を価値あるものとして評価するようなやり方で行動することによって、我々の自尊感情を高め」てくれるからである。こうした学童期から青年期にかけての仲間関係における「有効妥当性の確認 consensual validation」(Sullivan, 1953)を通して、幼児的な自己愛から現実的な根拠のある自尊心へと変形していく。

家族集団や仲間集団との正のフィードバック・ループを内在化したとも言い換えることができる集団同一性を確立した個人は、高い自尊心を持っていると考えられる。

1.3 研究意義と目的

現在、思春期、青年期を中心として、火急に対応が必要とされている不登校、引きこもり、あるいは、自傷行為、自殺未遂、性的逸脱行為、摂食障害、薬物依存、軽犯罪などの自己破壊症候群（Walsh & Rosen, 1988；松本, 2009）を引き起こす要因として、所属感の脆弱性と適応力の弱さが指摘されている（小谷, 2005）。また、逆に、カルト教団を盲信する青年の問題もある。つまり、前者は集団からの徹底した回避や集団との浅いつながりのみであり、後者は集団との一体化を求める動きであると言えよう。こうした「個」を取るか、「集団」を取るかの議論は、得てして二律背反的なものになりやすい。Eriksonは、集団同一性と自我同一性は対立するものでも、矛盾するものでもなく、それは人の成熟を促す両輪として捉えている。つまり、集団同一性の成熟過程を研究することで、深い集団へのコミットメントから自分らしさを作っていく成長のプロセスの検討が可能になると考えられる。この過程を明らかにすることは、集団を媒介に創造的な個人の成長をはかる学級集団や家族、職場などへの教育的、臨床的介入を考える上での一助になると思われる。

そこで、本研究では、集団同一性概念の教育・臨床的有用性を検討する一つの基礎的研究として、橋本ら（1999）が理論構成した集団同一性の成熟度を測定する尺度；青年期向け集団同一性尺度（Group Identity Scale for Adolescents, 以下略して『GIS-A』と記す）を作成し、尺度の信頼性、妥当性の検討を行うことを目的とする。

2. GIS-Aの作成と信頼性・妥当性の検討

2.1 尺度の構成

目的

橋本ら（1999）の集団同一性の位相発達理論に

基づいた測定尺度GIS-Aを作成し、その妥当性、信頼性を検討する。次に、集団同一性の成熟の諸相をプロフィールとして類型化する。そして、前出理論構成にて理論的関連の示された自尊心、神経症不安との関連を見ることで基準関連妥当性を確認する。

被調査者

都内の私立大学の文系学部に属する大学1～4年生、計205名（男性73名、女性132名）。年齢のレンジは18歳～25歳（中央値：20）であり、本研究では、操作的に青年期を30歳までとし、回答者全員を分析対象とした。

調査期間 1999年11月中旬～12月下旬。

調査材料

a. GIS-A

尺度の作成過程：「集団との関わり方質問紙」（宮下・大野, 1997）と“Group Identification Scale”（Hinkle, et al., 1989）を参考に、集団同一性位相発達理論上の第一位相から第四位相までに対応すると思われる項目を筆者自身が作成した。集団同一性は、定義で示した通り、複雑な構成概念であるために、操作的に、集団同一性発達位相に相当する集団体験から項目を作成し、それを想起できるかどうかという基準で、各項目を作成した。作成後、集団精神療法家（経験年数：14年）に理論構成を説明した上で、合議のもと項目の削除、修正、追加をし、結果として57項目（6件法）を予備尺度として選択した。

この予備尺度について都内の私立大学生、男性121名、女性58名の計189名（有効回答率：73%、年齢18歳～30歳：中央値20歳）を対象とした予備調査を行った。これらGIS-Aの57項目について、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。固有値が急激に下がる手前の次元までという基準によって4因子解が妥当と判断された。しかし、結果は、各位相で体験する共通性のある集団機能毎に分かれたと理解できる因子構造になっており、理論的に想定された位相との対応は見られなかった。本研究では理論をより重視するという立場から、因子分析により得られた因子を用いるのではなく、あらかじめ想定された各位

相に準拠して項目を分類し下位尺度（以下、下位位相尺度）とする。このような各下位位相尺度について修正尺度－項目間相関（以下ITと略記）分析を行い、IT相関係数が.35以下の項目を削除し、再度同様の分析を行った。第3下位位相尺度でIT相関係数が低い項目があったが、理論的に重要であったので本調査に残し、結果次第で削除することとした。各下位位相尺度の α 係数は、第1位相 $\alpha=.83$ 、第2位相 $\alpha=.86$ 、第3位相 $\alpha=.76$ 、第4位相 $\alpha=.83$ であった。また、4因子（下位因子尺度）の α 係数は、第I因子 $\alpha=.92$ 、第II因子 $\alpha=.77$ 、第III因子 $\alpha=.68$ 、第IV因子 $\alpha=.73$ であった。よって、因子的妥当性は得られなかったものの、十分な α 係数が確保され、理論的に整合している4下位位相尺度（計46項目）を本調査で検討することとした。

b. その他の尺度

自尊心を測るための「自尊心尺度」（山本・松井・山成，1982）と神経症不安を測るための「抑制不安尺度」（山本，1992）に加え、「現在力を入れている集団活動の有無」「その集団での役割／役職の有無」「実際に所属しない、思い入れのある集団の有無」を問う質問項目で質問紙を構成した。

作業仮説

集団同一性の位相発達モデルより、表2のような作業仮説を設けることができる。

表2 作業仮説

仮説 [1]	GIS-Aの下位尺度のそれぞれと自尊心得点が正の相関を持つ。
[1-1]	GIS-Aの下位尺度のそれぞれが全て高い群は、その他の群と比べて自尊心尺度の得点が高い。
仮説 [2]	GIS-Aの下位尺度のそれぞれと（成長）抑制不安尺度の得点は、負の相関を持つ。
[2-1]	GIS-Aの下位尺度のそれぞれが全て低い群は、その他の群に比べて抑制不安得点が高い。

2.2 本調査の結果

GIS-Aの信頼性と妥当性の検討

4下位位相尺度毎の α 係数を算出したところ、第1下位位相尺度の $\alpha=.85$ 、第2下位位相尺度の $\alpha=.79$ 、第3下位位相尺度の $\alpha=.69$ 、第4下位位相尺度の $\alpha=.81$ 、尺度全体の $\alpha=.91$ であった。下位位相それぞれに対する各項目のIT相関係数を表3に示す。また、GIS-Aと自尊心尺度ならびに、抑制不安尺度の相関係数を算出したところ、どちらも第3位相を除いて、前者とは有意な正の相関、後者とは有意な負の相関を示した（表4）。このことからGIS-Aの基準関連妥当性が確認された。

GIS-Aによる類型化とその他の関連

GIS-Aの各位相の特徴が個々の青年の中でどのような関係で存在するかについて検討するために、各4下位位相尺度の偏差値を変量として、階層型のクラスター分析（ウォード法）を行い、以下の4クラスターを得た。以下に示した通り、そのクラスターの特徴から、集団同一性成熟型（以下、成熟型と記す）、葛藤型、擬似型、未熟型の4類型が導きだされた（図1）。各位相得点についてクラスターを要因とした一要因分散分析を行ったところ、すべての位相についてクラスターの主効果が見られた。クラスター別に多重比較したところ表5のようになった。

作業仮説の検討

仮説 [1] [2] は、妥当性の検討のところで述べたように、第3位相以外の位相得点と自尊心、抑制不安との相関が見られたことから、部分的な支持を受けた。自尊心得点および抑制不安について、クラスター（4）×性別（2）の2元配置分散分析およびTukeyの多重比較を行った（表6）。その結果、それぞれにクラスターの主効果が見られた。自尊心に関しては、成熟型が、未熟型、葛藤型と比べて有意に高い得点であった。また、不安に関しては、未熟型と葛藤型が擬似型、成熟型に比べて有意に高く、仮説 [1-1] [2-1] は部分的に支持された。

表 3 GIS-Aの項目

	No.	項目	IT 値
第1位相	5	自分は家族の一員であると胸を張って言える。	0.602
	15	自分の家族が馬鹿にされた時、自分も馬鹿にされたと感じる／感じたことがある。	0.379
	20	この家の子でなければ良かったのと思うことがある。(R)	0.491
	24	家族の者と腹を割って話す／話したことがある。	0.533
	27	自分の家族は魅力的であると感じる。	0.739
	34	家族と離れていても、家族との体験を生き生きと思い出す。	0.741
	38	家族と怒り、悲しみ、喜びなどの感情の交流をしたことがある。	0.651
	42	自分は家族の行事に喜んで参加する。	0.683
第2位相	1	魅力的な仲間集団を持っている／いた。	0.463
	2	嫌な気分になったら、それを解決するよりも仲間とパツと騒いで忘れようとする方だ。	0.283
	3	仲間集団のみんなで協力して何かを生み出すのが好きだ。	0.596
	8	何かの行事の時、所属集団やチームのためにいっしょうけんめい応援する／したことがある。	0.553
	10	私は、仲間と張り合ったり競争するような仕事やスポーツが好きだ。	0.157
	11	仲間内で頑張ったことを家族は喜んでくれる／くれた。	0.385
	12	仲間集団と一緒に活動することに喜びを感じる。(例：スポーツ、食事、カラオケ、旅行、ゲームなど)	0.649
	13	仲間と大声を出したり、大さわぎをすることに喜びを感じる／感じたことがある。	0.565
	17	仲良しの友達グループ（3人以上）がある／あった。	0.327
	22	所属集団で、その規則にしたがって、みんなと一緒に活動したことがある。	0.345
第3位相	31	所属集団の活動目標が達成されたときの充実感が好きだ。	0.609
	40	所属集団の価値観や決まり事を進んで守る方だ。	0.341
	44	家族とはしなかったようなことでも仲間集団にいとできる。	0.324
	7	私はこれまで集団でいるよりは、恋人や友達とふたりきりでいる方が多かった。(R)	0.219
	9	仲間に自分の弱さやつらさを見せる方だ。	0.310
	14	仲間集団以外の人のうわさ話で盛り上がるのが好きだ。	0.222
	18	仲間内でお互いに似ている部分（性格など）について話す／したことがある。	0.330
	26	仲間内で性的な悩みを語ることがある／あった。	0.339
	28	同性の仲間内での評価が大事だと思う。	0.207
	33	仲間集団で将来の夢や希望を話す／話したことがある。	0.441
第4位相	35	同性同士でしかわからない気持ちがあるから、同性の仲間が大切だと思う／思うことがある。	0.476
	36	仲間の話を聞いて、自分一人が弱いわけではないと思ったことがある。	0.339
	37	同性の仲間の中で評価されるように頑張る／頑張ったことがある。	0.385
	41	一人で孤立するのは嫌なので、自分と気の合う仲間を求める／求めたことがある。	0.408
	46	自分の悩みに取り組む上で仲間集団は役に立たないと思う。(R)	0.399
	4	同性の仲間内で異性について語り合えることの意味を知っている。	0.441
	6	皆に嫌われようとも自分のグループを良い方向に改善する努力をする／したことがある。	0.524
	16	親しい仲間に貢献できる自分らしい長所があると思う。	0.554
	19	異性の仲間がいる／いた。	0.371
	21	所属集団では、自分が伝えたいことをはっきりと言う方だ。	0.558
第4位相	23	所属している集団内で、怒りや不穏な雰囲気が漂ったらなるべく表に出して話し合いをする。	0.536
	25	一人で生活できる力をアップさせるのに仲間が役に立つと思う。	0.309
	29	仲間から指摘された自分の間違いを認めることができる。	0.335
	30	いろいろな集団を経験すると、自分らしさの幅が広がると思う。	0.242
	32	仲間の中ではいろんな役割を試してみる。	0.425
	39	自分とは考え方・価値観などの異なる仲間のことも認められる。	0.375
	43	仲間と納得いくまで話し合いをする方だ。	0.619
	45	ケンカや意見の食い違いを乗り越えることで仲間の団結力を増した経験がある。	0.563

(Rは反転項目)

表 4 GIS-Aと自尊心尺度、(成長)抑制不安尺度の相関係数

	自尊心	(成長) 抑制不安
第1位相：家族同一性の形成	.32**	-.33**
第2位相：二次的集団同一性の形成	.21**	-.23**
第3位相：集団同一性の追求	.08	-.00
第4位相：集団同一性の成熟	.39**	-.37**

**p<.01

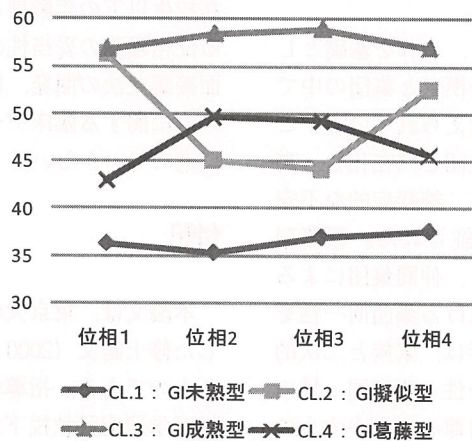


図 1 各クラスターのプロフィール

表 5 クラスター別のGIS-A位相得点 (偏差値) の平均と標準偏差, および多重比較

	位相 1	位相 2	位相 3	位相 4
CL.1 : GI未熟型 (n=31)	36.28 (9.72)	35.33 (6.20)	36.99 (6.26)	37.63 (7.39)
CL.2 : GI擬似型 (n=43)	56.33 (5.67)	45.09 (7.60)	44.2 (7.80)	52.51 (6.30)
CL.3 : GI成熟型 (n=78)	56.78 (6.46)	58.39 (5.42)	58.95 (5.78)	56.85 (7.30)
CL.4 : GI葛藤型 (n=58)	42.96 (7.67)	49.66 (6.10)	49.27 (5.24)	45.62 (7.96)
クラスター別多重比較	CL.1,4<CL.2,3*	CL.1,2,4<CL.3* CL.1,2<CL.4* CL.1<CL.2*	CL.1,2,4<CL.3* CL.2<CL.4* CL.1<CL.2,4*	CL.1,2,4<CL.3* CL.4<CL.2* CL.1<CL.2,4*

(カッコ内は標準偏差)

* p <.05

表 6 GIS-Aのクラスター別, および性別の平均値と分散分析結果

尺度	CL.1 GI未熟型		CL.2 GI擬似型		CL.3 GI成熟型		CL.4 GI葛藤型		性差	クラスター差	交互作用 性差*クラスター
	男性 n=12	女性 n=19	男性 n=10	女性 n=33	男性 n=21	女性 n=57	男性 n=31	女性 n=27	F値	F値	F値
自尊心	29.75 (7.02)	27.42 (7.65)	33.40 (6.86)	32.09 (6.86)	35.90 (5.24)	32.28 (6.78)	28.09 (7.12)	30.07 (6.61)	1.42 n.s.	7.14** CL.1,4<CL.3*	1.77 n.s.
抑制不安	38.41 (7.62)	40.47 (10.95)	29.20 (15.95)	32.21 (11.43)	27.52 (7.76)	34.50 (12.29)	42.00 (11.18)	37.62 (8.88)	1.24 n.s.	8.68** CL.2,3<CL.4* CL.2,3<CL.1*	2.66* 男: CL.3<2<1<4 女: CL.2<3<4<1

(カッコ内は標準偏差)

*p <.05 **p<.01

2.3 考察

IT分析の結果より、GIS-Aは高い内的整合性が認められ、全体のみならず、下位尺度についても信頼性を満足させる水準にあると考えられる。自尊心、不安に関する各作業仮説に関しては、第3位相についてのもの以外はおおむね認められたと考えられる。クラスター分析による検討においても、成熟型は未熟型、葛藤型よりも自尊心が高く、不安が少ないことが認められた。

成熟型は家族同一性を獲得し、それを基礎とした多重集団所属を果たし、その模索と集団の中での自己の確立をなしていると考えられている。このタイプに属する人は様々な集団を内在化し、高く、揺らぎにくい自尊心をもち、神経症的な不安を感じにくいということが実証された。葛藤型は、家族同一性が未確立であり、仲間集団による修正はあるものの、成熟性に欠ける集団同一性を持っている群と言える。この群は、家族と二次的集団での葛藤、および個人同一性と集団同一性の葛藤が予想され、その葛藤が自尊心を脅かすものとなっていることが考えられる。未熟型は集団所属に関して文字どおり未熟であることを示す。自尊心の核となる集団経験がなく、不安も高くなっている。疑似型は、あまりにも集団同一性の基盤として家族の存在が大きすぎて、二次的集団への移行に失敗している群であると考えられる。この群は、早期完了的なアイデンティティ形成が特徴であると思われる。二次的集団での不安や葛藤は、家族に依存することでまたは、反動形成的に自己主張をすることで不安の否認、抑圧を行っていると理解できる。つまり、この群には少なからず潜在的な不安の存在が予測される。

3. 結論と今後の課題

本研究では、青年期にある日本の大学生を対象として、E. H. Eriksonの集団同一性概念の有用性の検討を試みた。その発達位相理論を反映した質問紙GIS-Aを作成し、集団同一性が成熟した個人においては、高い自尊心の保持が可能であり、神経症不安が顕著に低減していることが実証的に明

らかになった。

現代は、コミュニティ活動の低減や対人関係の希薄化が伝えられて久しい。本研究は、集団同一性が、現代青年の鍵成熟課題であることの一端を明らかにし、集団同一性を成熟させる教育的、臨床的な介入の必要性を訴える具体的な証左となると筆者は考える。今後の課題としては、性差を含めた集団同一性理論の精緻化、GIS-Aの標準化、高校生以下の年齢層を対象としたGISの開発による位相理論の妥当性の検討、集団同一性に関する面接調査法の開発、集団同一性獲得過程・メカニズムに関する臨床データの蓄積が挙げられ、さらに進めていきたい。

付記

本論文は、東京大学大学院教育学研究科に提出した修士論文（2000年度）の一部を加筆・修正したものである。指導教官であった東京大学大学院教育学研究科教授下山晴彦先生、研究上多くのご示唆をいただいた国際基督教大学高等臨床心理学研究所教授小谷英文先生、そして、警視庁の市橋直哉氏には、記して、深謝するものである。

参考文献

- Blos, P. (1967). The second individuation process of adolescence. *The Psychoanalytic study of the child*, 22, 162-186.
- 近田輝行 (1984). 自我同一性と親密性—後期青年の同輩集団と自己確立をめぐる— 立教大学心理学研究年報, 26, 36-46.
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York, London, W. W. Norton & Company. 小此木啓吾訳 (1973). 自我同一性 誠信書房
- Erikson, E. H. (1968). *Identity: Youth and crisis*. New York, London, W. W. Norton & Company. 岩瀬庸理訳 (1973). 主体性—青年と危機 北望社
- Grunebaum, H. & Solomon, L. (1987). Peer relationship, self-esteem, and the self. *International journal of group psychotherapy*, 37, 475-513.
- 橋本和典 (2008). 男性の成熟性—集団同一性から自我同一性の成熟 小谷英文 (編) ニューサイコセラピーグローバル社会における安全空間の創成 ICU 21世紀COEシリーズ第3巻 風行社 pp. 59-82.

- 橋本和典・西川昌弘・河野貴子 (1999). E. H. Eriksonの集団同一性概念の治療的仮説構成—青年期集団精神療法における有効性の検討— 集団精神療法, 15 (1), 63-72.
- 廿日出里見 (1992). 幼児の集合的アイデンティティ 広島大学教育学部紀要, 40, 193-200.
- Hinkle, S., Taylor, L. & Fox-Cardamone, D. (1989). Intragroup identification and intergroup differentiation-A multicomponent approach. *British Journal of Social Psychology*, 28, 305-317.
- Jacobson, E. (1964). The self and the object world. Madison, Connecticut, International Universities Press.
- 伊藤洸訳 (1981). 自己と対象世界—アイデンティティの起源とその展開 岩崎学術出版
- Kibel, H. (1991). The therapeutic use of splitting: The role of the mother group in therapeutic differentiation and practicing. In S. Tuttmann (Ed.), *Psychoanalytic group theory and therapy* (pp.113-132). Madison, Connecticut, International Universities Press.
- 小谷英文 (1991). 思春期における集団の力とその意味 月刊生徒指導, 6, 18-23.
- 小谷英文 (2005). 集団の安全力学 小谷英文 (編) 心の安全空間—家庭・地域・学校・社会 現代のエスプリ別冊 至文堂 pp. 106-120.
- 松本俊彦 (2009). 自傷行為の理解と援助—「故意に自分の健康を害する」若者たち 日本評論社
- 無藤清子 (1979). 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性 教育心理学研究, 27 (3), 178-187.
- Newman, P., & Newman, B. (1976). Early adolescence and its conflict : Group identity versus alienation. *Adolescence*, 11(42), 261-274.
- 宮下一博・大野朝子 (1997). 青年の集団活動への参加とアイデンティティ 千葉大学教育学部研究紀要, 45, 7-14.
- Rachman, A. (1975). *Identity group psychotherapy with adolescents*. Northvale, New Jersey, London, Jason Aronson Inc.
- Rachman, A. (1989). Identity group psychotherapy with adolescents : A reformulation. In F. Azima & L. Richmond (Eds.) *Adolescent group psychotherapy* (pp. 21-41). Madison, Connecticut, International Universities Press.
- Ritzman, E. R. (1973). Identity formation and effects of volunteer work experiences in community college student — An exploratory study with implications for counseling and education. *Dissertation abstracts international*, 39 (9-A), 4954.
- Scheidlinger, S. (1964). Identification, the sense of belonging, and of identity in small groups. *International journal of group psychotherapy*, 14, 291-306.
- Sullivan, H. S. (1953). The interpersonal theory of psychiatry. New York, London, W · W · Norton & Company. 中井久夫他訳 (1990). 精神医学は対人関係論である みすず書房
- Tajfel, H. & Turner, J. C. (1985). The Social Identity Theory of Intergroup Behavior. In S. Worchel & W. G. Austin (Eds.), *Psychology of intergroup Relations* (pp. 7-24). Chicago, Nelson-Hall.
- Walsh, B. & Rosen, P. (1988). Self-mutilation-Theory, research, and treatment. New York, London, The Guilford Press. 松本俊彦・山口亜希子 (訳) (2005). 自傷行為—実証的研究と治療指針 金剛出版
- 山本誠一 (1992). 青年期における不安の二側面に関する実証的検討 心理学研究, 63 (1), 8-15.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.